

宗 像

武丸町添遺跡

宗像市文化財調査報告書

第 20 集

1989

宗 像 市 教 育 委 員 会

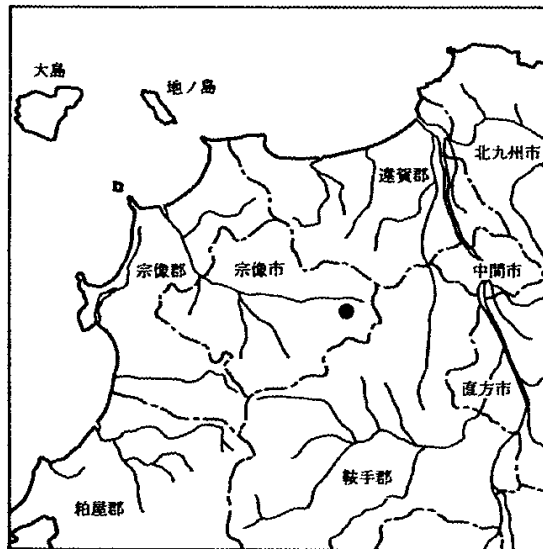


宗 像

武丸町添遺跡

宗像市文化財調査報告書

第 20 集



1989

宗像市教育委員会

序 文

武丸町添遺跡は昭和63年度に実施された吉武地区県営圃場整備事業に伴う事前調査として緊急発掘調査されました。

この調査で発見された数基の古墳は、吉武地区における2例目の古墳調査で、前回調査の武丸皆真庵遺跡の調査とあわせて、古代宗像における周辺地域のありかた、とくに吉武地区の古墳時代を解き明かす上で、非常に重要な位置を占める遺跡の1つであることがわかりました。また、この遺跡から発見された竪穴遺構は、前回調査の武丸原遺跡とともに戦国時代の渦中に巻き込まれ、その姿を消していった宗像氏の足跡をたどる重要な遺跡の1つといえます。

この調査で発見されたこれらの遺構や遺物は、むかしの宗像を知る上で非常に重要な歴史資料であり、また、文化遺産でもあります。

宗像市では、これらの文化遺産を歴史的教材として広く活用し、現在そして将来において継承していく所存であります。

本書が今後の文化財保護および研究の一資料として貢献できることを願いたしますとともに発掘調査全般にわたってご協力いただいた多くの方々に心から感謝の意を表す次第です。

平成元年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

例 言

1. 本書は、昭和63年度に国・県の補助を受けて実施した宗像市内の埋蔵文化財発掘調査のうち吉武地区における武丸町添遺跡の報告書である。
2. 本地区の発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となった。
3. 本書使用の作図および製図は、安部裕久及び清家直子・広橋久美が行なった。
4. 本書使用の写真は、現地撮影を清水比呂之が行ない、遺物撮影を安部が行なった。
5. 図版の遺物番号は、挿図番号と一致する。 (例 2-4……………第2図4)
6. 本書の執筆及び編集は、安部が行なった。

本 文 目 次

	本文頁
1. はじめに ……………	1
2. 発掘調査の概要 ……………	1
3. 位置と環境 ……………	3
4. I区の調査 ……………	3
5. II区の調査 ……………	22
6. まとめ ……………	25

挿 図 目 次

第1図 武丸町添遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000) ……………	2
第2図 武丸町添遺跡発掘調査区図 (1/2,500) ……………	4
第3図 武丸町添遺跡I区地形測量図 (1/400) ……………	5
第4図 武丸町添遺跡I区遺構配置図 (1/400) ……………	6
第5図 武丸町添遺跡I区1号墳主体部実測図 (1/40) ……………	7
第6図 武丸町添遺跡I区2号墳主体部実測図 (1/40) ……………	8
第7図 武丸町添遺跡I区3号墳主体部実測図 (1/40) ……………	9

第8図	武丸町添遺跡Ⅰ区4号墳主体部実測図(1/40)	10
第9図	武丸町添遺跡Ⅰ区5号墳主体部実測図(1/40)	11
第10図	武丸町添遺跡Ⅰ区6号墳主体部実測図(1/40)	12
第11図	武丸町添遺跡Ⅰ区出土遺物実測図Ⅰ(1/2)	14
第12図	武丸町添遺跡Ⅰ区出土遺物実測図Ⅱ(1/3)	15
第13図	武丸町添遺跡Ⅰ区出土遺物実測図Ⅲ(1~3は1/3、4は1/4)	16
第14図	武丸町添遺跡Ⅰ区出土遺物実測図Ⅳ(1/3)	16
第15図	武丸町添遺跡Ⅰ区竪穴遺構実測図(1/40)	19
第16図	武丸町添遺跡Ⅰ区出土遺物実測図Ⅴ(1/3)	20
第17図	武丸町添遺跡Ⅱ区遺構配置図(1/200)	21
第18図	武丸町添遺跡Ⅱ区1号竪穴遺構実測図(1/40)	22
第19図	武丸町添遺跡Ⅱ区2号竪穴遺構実測図(1/20)	23
第20図	武丸町添遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(1~3は1/3、4は1/6)	24

図 版 目 次

図版1	武丸町添遺跡周辺空中撮影	
図版2	1. 武丸町添遺跡調査前写真	2. 武丸町添遺跡調査前写真
図版3	1. 武丸町添遺跡調査後写真	2. 武丸町添遺跡調査後写真
図版4	1. Ⅰ区1号墳主体部	2. Ⅰ区2号墳主体部
	3. Ⅰ区3号墳主体部	4. Ⅰ区4号墳主体部
図版5	1. Ⅰ区5号墳主体部	2. Ⅰ区6号墳主体部
	3. Ⅱ区1号竪穴遺構	4. Ⅱ区2号竪穴遺構
図版6	武丸町添遺跡出土遺物	
図版7	武丸町添遺跡出土遺物	

1. はじめに

かつて宗像市は、純農村地域であったが、福岡市・北九州市のヘソともいえる好位置に所在しており、現在では、両都市圏の産業および経済基盤を支える多くの労働力を供給している都市近郊型の住宅地域となっている。当市のこのような都市化現象の中で、今現在、複合的な生産基盤の抜本的な整備が進められており、武丸町添遺跡の調査も、このような整備改善事業の一環である県営圃場整備事業の事前発掘調査として実施されたものである。

また、本調査に対応する調査体制は、次の組織によって実施したものである。なお、本調査を実施するに当たって、福岡農林事務所、吉武土地改良区、発掘調査に参加された方々や発掘調査区域周辺の多くの方々に甚大なる御協力をいただき、ここに感謝の意を表したい。

組 織

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森下 照清
		教 育 部 長	白木 国明
		社会教育課長	吉田 繁利
		文 化 係 長	尾山 清
庶務・会計		主 事	大賀由美子
発掘調査		主 事	原 俊一
		技 師	清水比呂之
		技 師	安部 裕久

2. 発掘調査の概要

本遺跡は、宗像市大字武丸字町添に所在する遺跡で、現状は山林及び田圃並びに畑地であった。本調査は、昭和63年度、吉武地区県営圃場整備事業の事前調査として実施された緊急発掘調査で、昭和63年6月13日に着手し工事との調整を計りながら12月26日までの期間を要した。調

所在地	福岡県宗像市大字武丸字町添
調査期間	昭和63年6月13日から12月26日
調査面積	I区 約 1,500㎡・II区 約 100㎡



第1図 武丸町添遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 武丸町添遺跡 | 2. 武丸原遺跡 | 3. 武丸高田遺跡 | 4. 武丸小伏遺跡 |
| 5. 武丸大上げ遺跡 | 6. 武丸皆真庵遺跡 | 7. 吉留京田遺跡 | |

査区域は圃場整備事業において削平される地域に限って試掘調査をおこない、その結果を踏まえ2箇所を面的調査を実施した。その調査面積は、丘陵尾根線上のものが約1,500㎡で、丘陵先端のやや西側のものが約100㎡であった。その調査の結果、丘陵尾根線上において6基の古墳及び6基の竪穴遺構を検出し、丘陵先端のやや西側において2基の竪穴遺構を検出することができた。

3. 位置と環境 (第1・2図)

武丸町添遺跡は、宗像市大字武丸町添に所在する遺跡で、東に宗像市郡を潤す唯一の水源である釣川の源流を望み、南に宗像市と鞍手郡の郡境である標高325.7mの新立山を背に仰ぎ見る。舌状丘陵の間に隆起した標高約45m～約75.5mの南北に長い独立丘陵上に位置しており、現水田面との比高差は丘陵頂部で約28.5mである。遺跡の分布は、丘陵端及び丘陵尾根線上からやや西斜面に広がっている。このうち、本調査では、丘陵頂部尾根線上から西斜面にかけての広がりをⅠ区とし、丘陵端の西斜面をⅡ区とした。

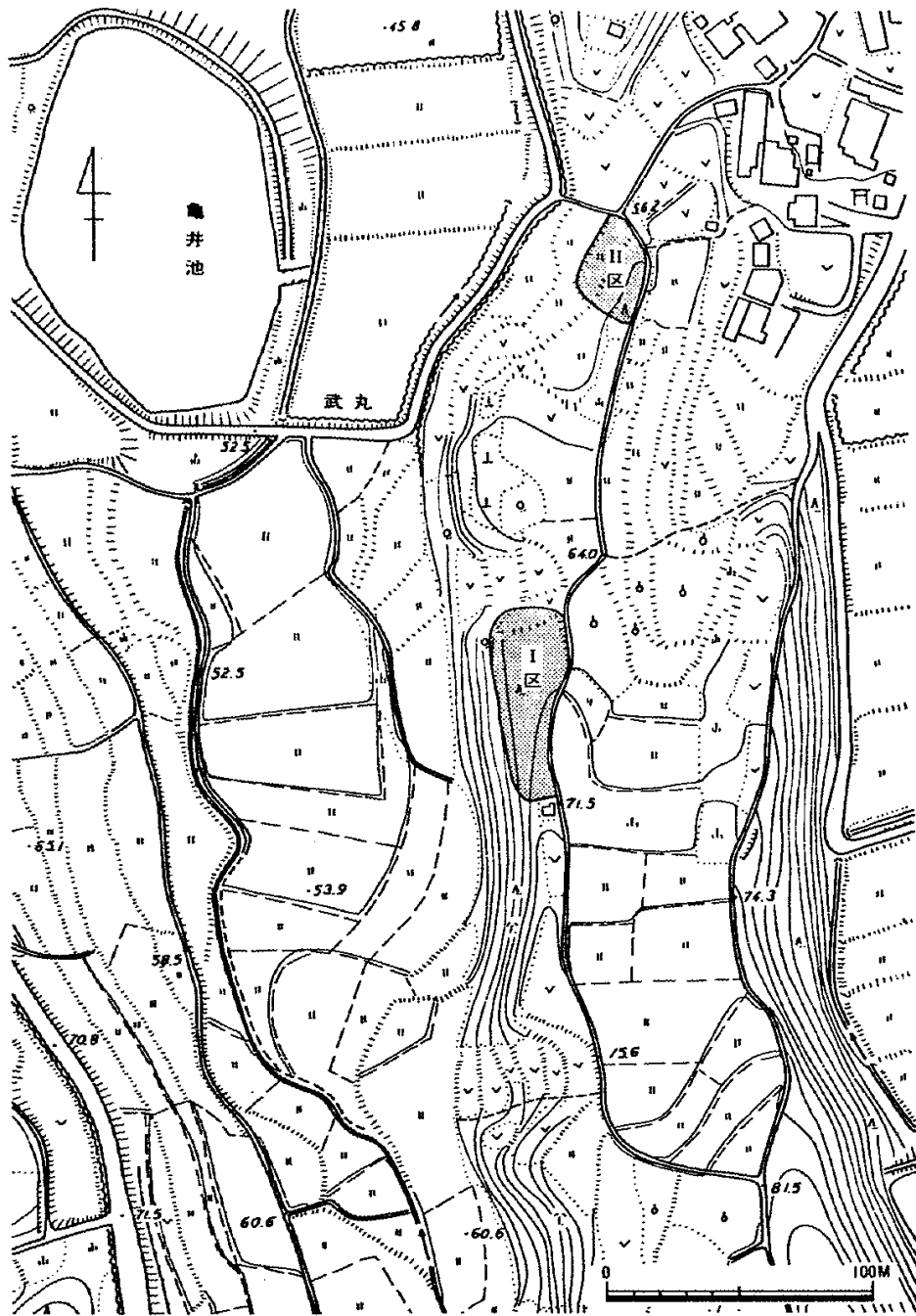
本遺跡もそうであるが、ここ数年に渡るこのような圃場整備事業に伴う事前発掘調査において、遺跡の分布状況や歴史的重厚性などのほとんど解明されていなかったここ吉武地区においても、徐々にではあるがそのペールがはがされようとしている。その1例として、本遺跡周辺の遺跡をみることにする。

本遺跡周辺は、新立山と釣川とによって形成された扇状地形が広がり、これを取り巻くように居住地の帯びがみうけられる。また、舌状丘陵に挟まれた谷水田は、新立山及び丘陵からの湧水により満々と水をたたえている。このような環境下にあつてこの地は、住環境に適した土地と見られ、製鉄炉趾を検出した武丸小伏遺跡^①や武丸高田遺跡^②、本遺跡と何らかの因果関係を持つものと考えられる吉留京田遺跡^③などの遺跡が分布している。そして、これらの遺跡を取り巻く丘陵上には本遺跡をはじめ武丸原遺跡^④などの墳墓群が多く点在している。

このような立地にある本遺跡の調査が、この地域における今後の調査及び遺跡の性格を押えるうえで、重要な位置を占めるものとなることを期待したい。

4. Ⅰ区の調査 (第3・4図)

本区は、標高73.412mを最高所とする南北に延びる独立丘陵の丘陵頂部に位置し、南北約65m、東西約20mの範囲に遺構が分布している。本区検出の遺構は、円墳6基、竪穴遺構6基で



第2図 武丸町添遺跡発掘調査区図 (1/2,500)

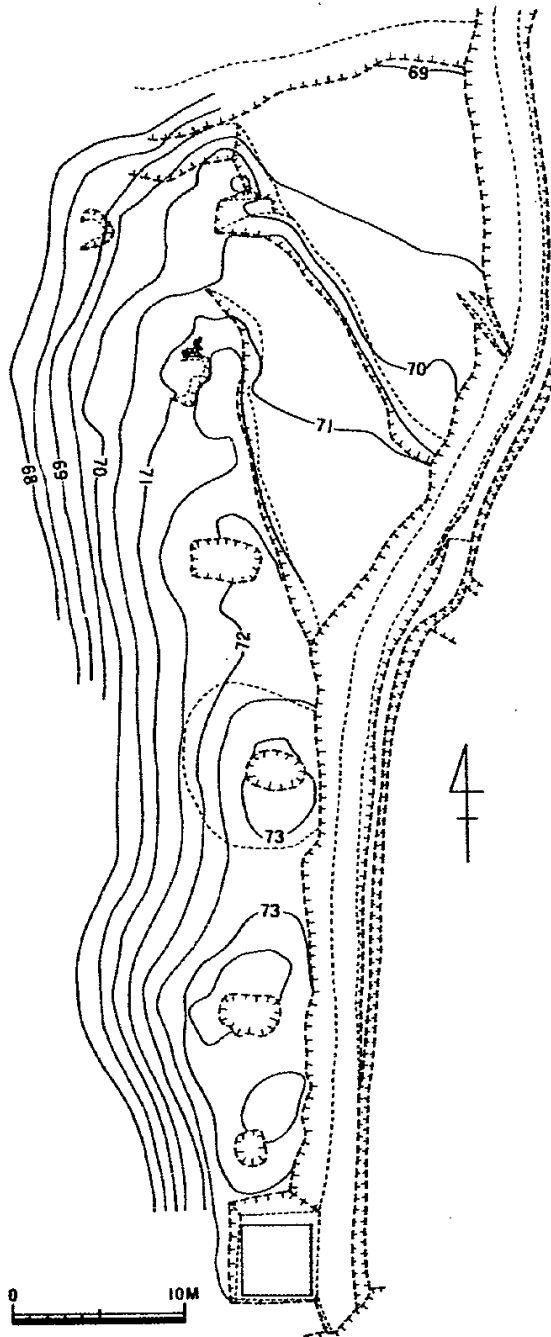
ある。これらのうち、第1号竪穴遺構及び1号墳並びに3号から6号墳は、南北に延びる尾根線上にほぼ等間隔で並ぶように分布しており、2号墳及び2号から6号竪穴遺構は、尾根線上からやや西斜面に下った位置にある。また、この他に攪乱が著しく調査では検出できなかったが、本区出土の寛永通宝に伴う遺構及び肥前窯系の瓶に伴う遺構が存在したことが考えられる。

本区検出遺構のうち、古墳に関しては、主軸を北から約45°東に振った2号墳は別として、ほとんどのものが西側に開口しており、竪穴遺構に関しては、主軸方向が等高線に対して直交する1号及び5号竪穴遺構と主軸方向が等高線に対して平行する2号から4号及び6号竪穴遺構が存在している。

(1) 古墳の調査

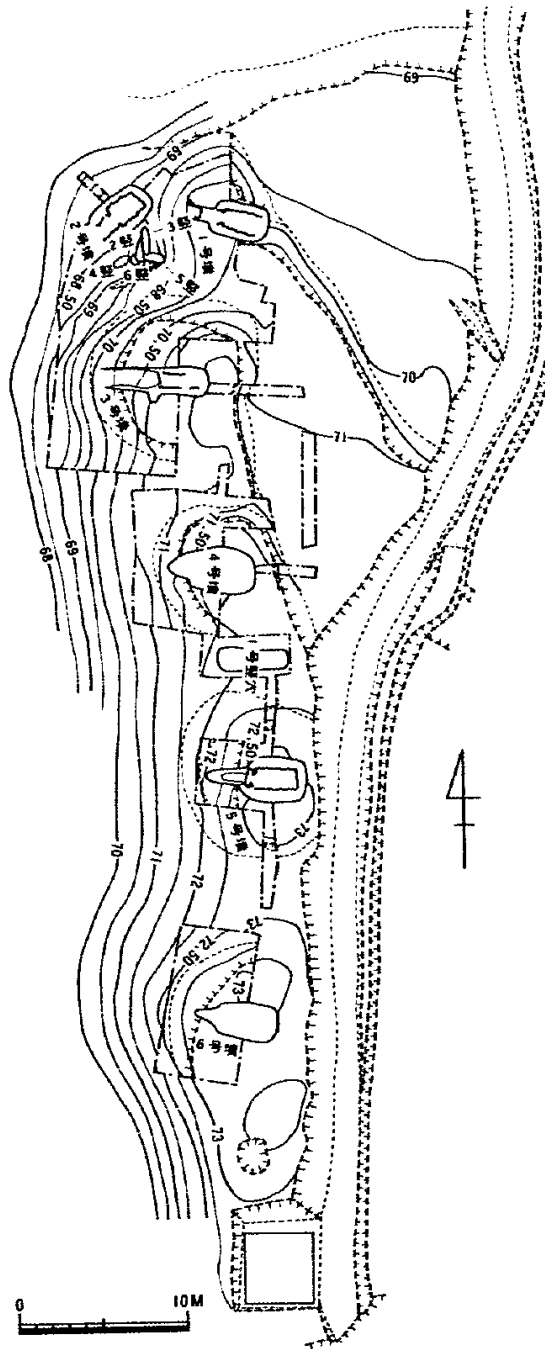
1) 遺 構 (第5~10図)

本遺跡における古墳は、大別して、3つに分けることができる。その1は、前庭側壁を持たないもので、3号墳がこれに当たる。当遺構は、両袖石を持つ横幅の狭い長方形プランを呈しており、全長2.205 m、最大幅0.735 mを測る

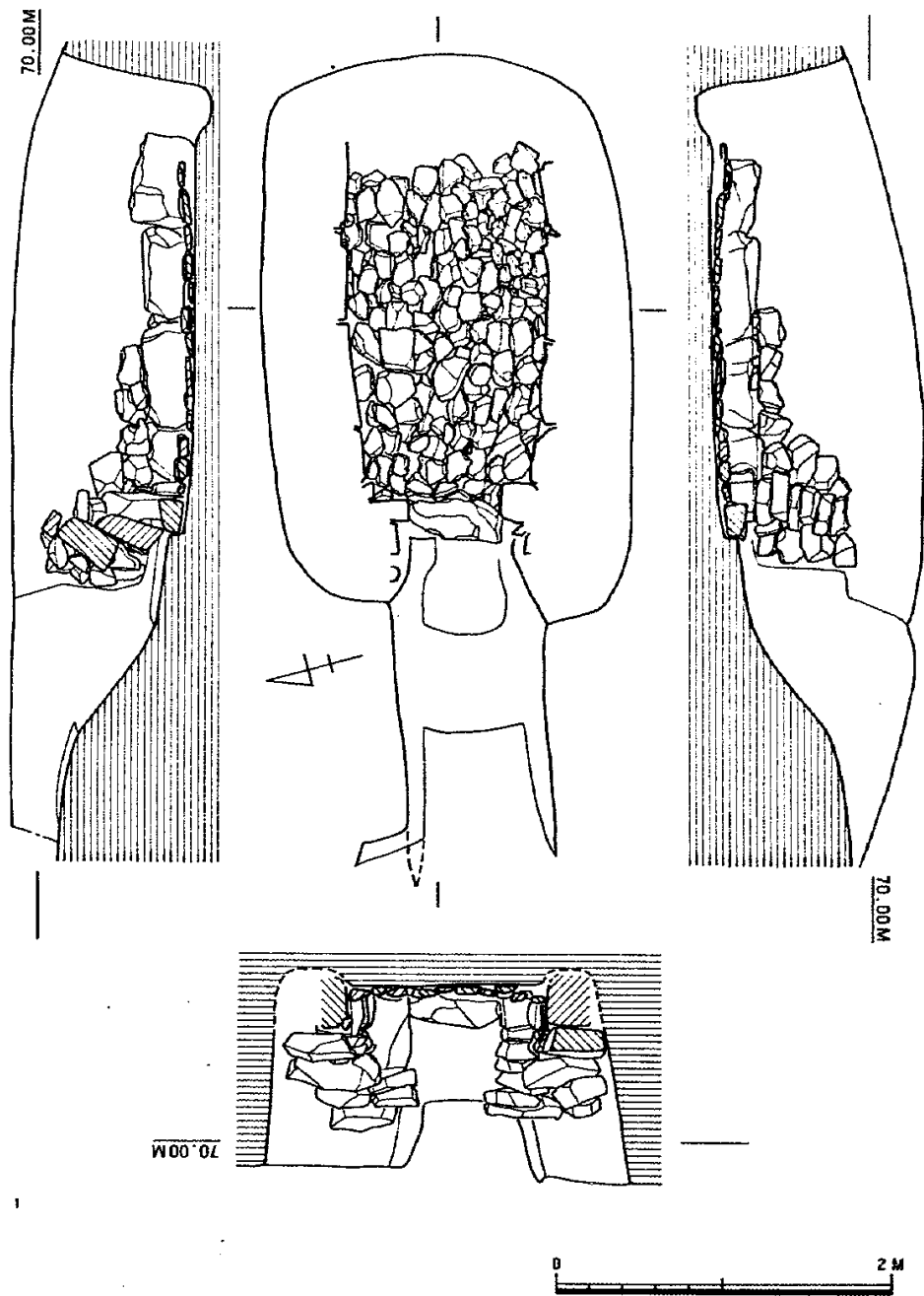


第3図 武丸町添遺跡I区地形測量図 (1/400)

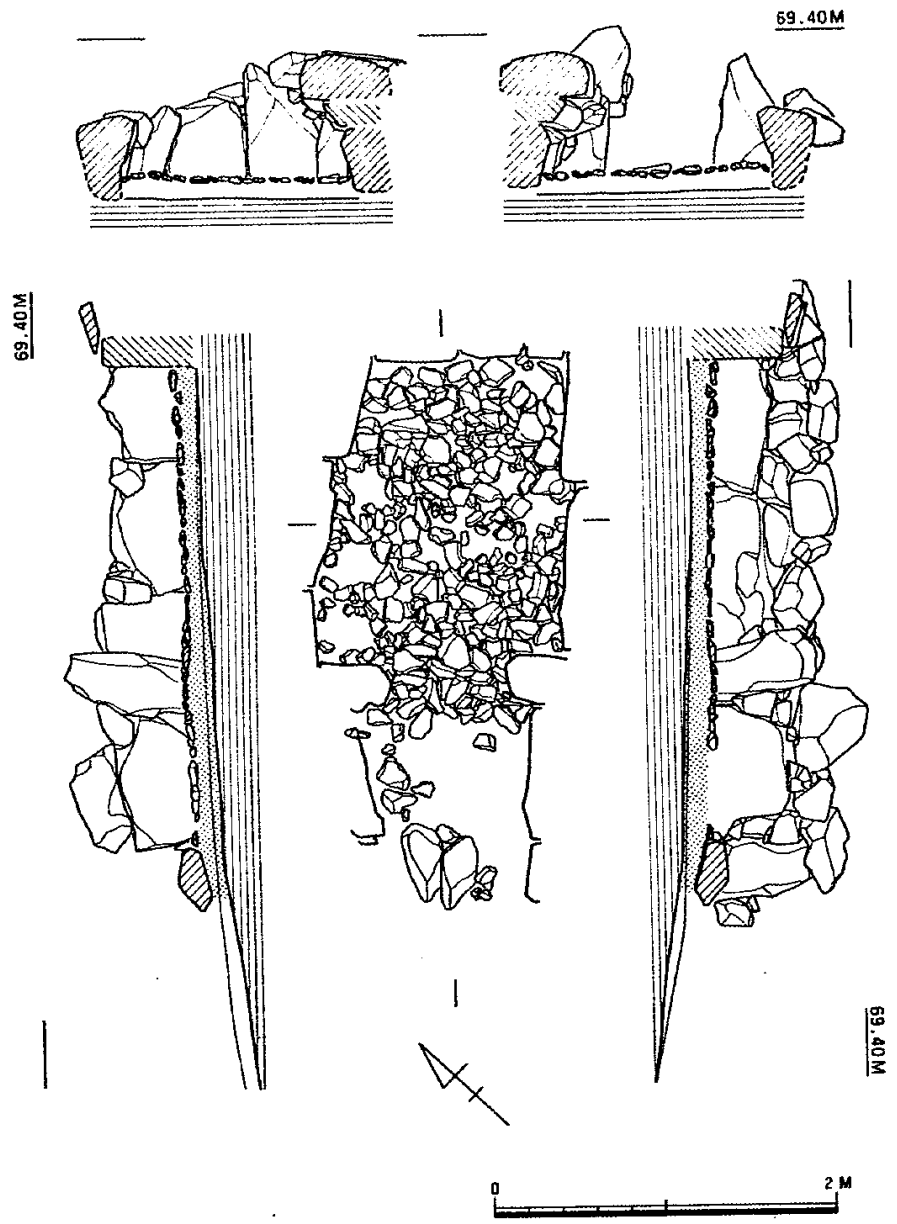
もので、1マス0.245mの方眼を当てると、縦軸9コマ、横軸3コマできれいに納まる。その2は、前庭側壁は持つが羨道を持たないもので、1号・5号墳がこれに当たる。当遺構は、両袖石を持ち玄門部幅より奥壁幅が長くなる所謂羽子板状プラン若しくは、玄門部及び奥壁部よりも中央部幅が最大幅となるやや中膨らみのプランを呈するものである。このうち、2号墳は、前者に当たるもので、全長2.695m、最大幅1.14mを測り、1マス0.245mの方眼を当てると、縦軸11コマ、横軸4コマできれいに納まる。後者に当たる5号墳は、全長3.0m、最大幅1.80mを測るもので、1マス0.30mの方眼を当てると、縦軸10コマ、横軸4コマできれいに納まる。また、大変な推測になると思うが、4号・6号墳もこの類の範疇に納まるものと考えたい。その3は、羨道を持つもので、2号墳がこれに当たる。当遺構は、墓道から『逆ハの字』形に広がる羨道を持つもので、玄室に関する値では、縦横の比率が4:5になるものであるが、玄門部幅より奥壁部幅が短いものである。全長3.15m、最大幅1.40mを測るもので、1マス0.35mの方眼を当てると、縦軸9コマ横軸4コマできれいに納まる。



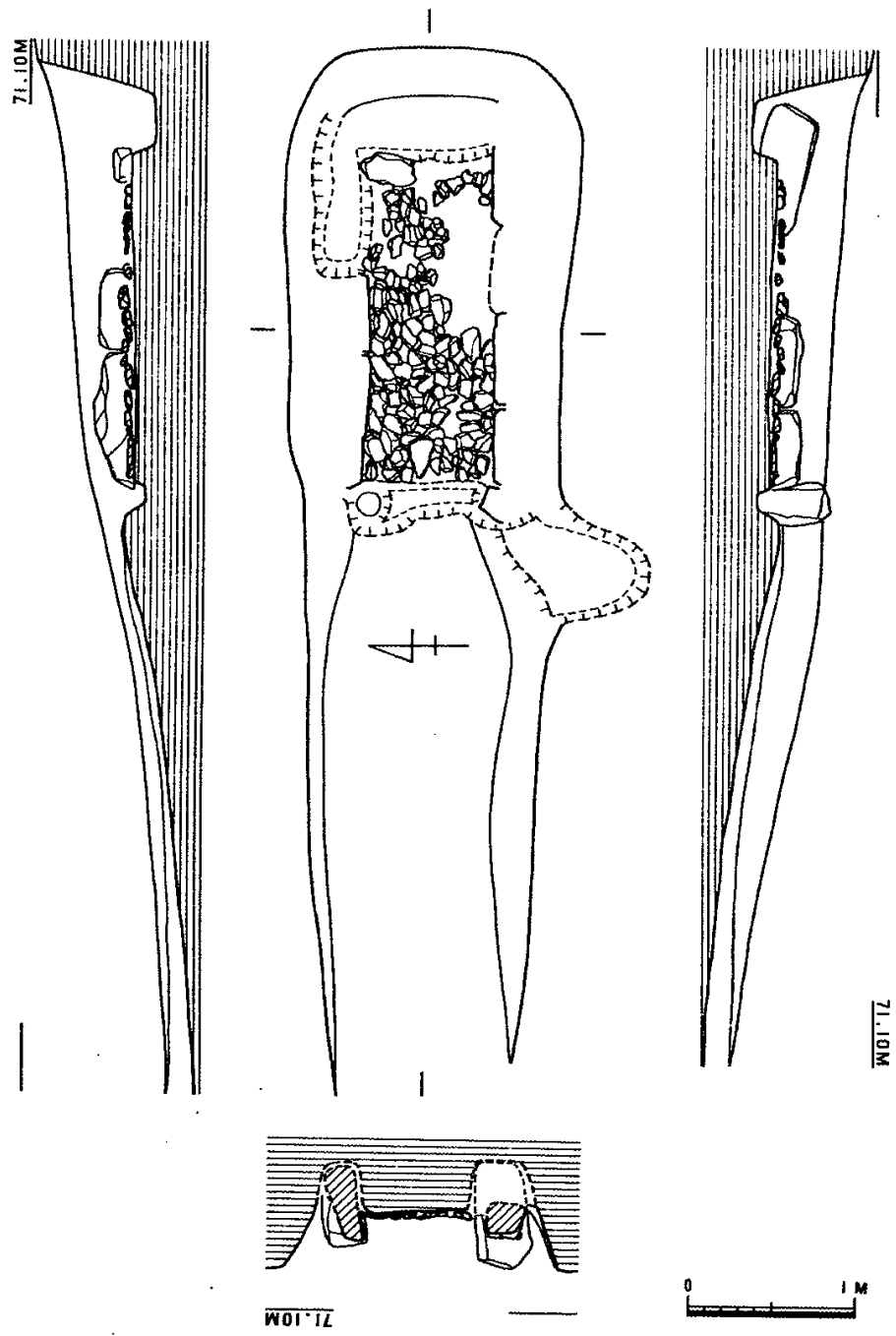
第4図 武丸町添遺跡I区遺構配置図(1/400)



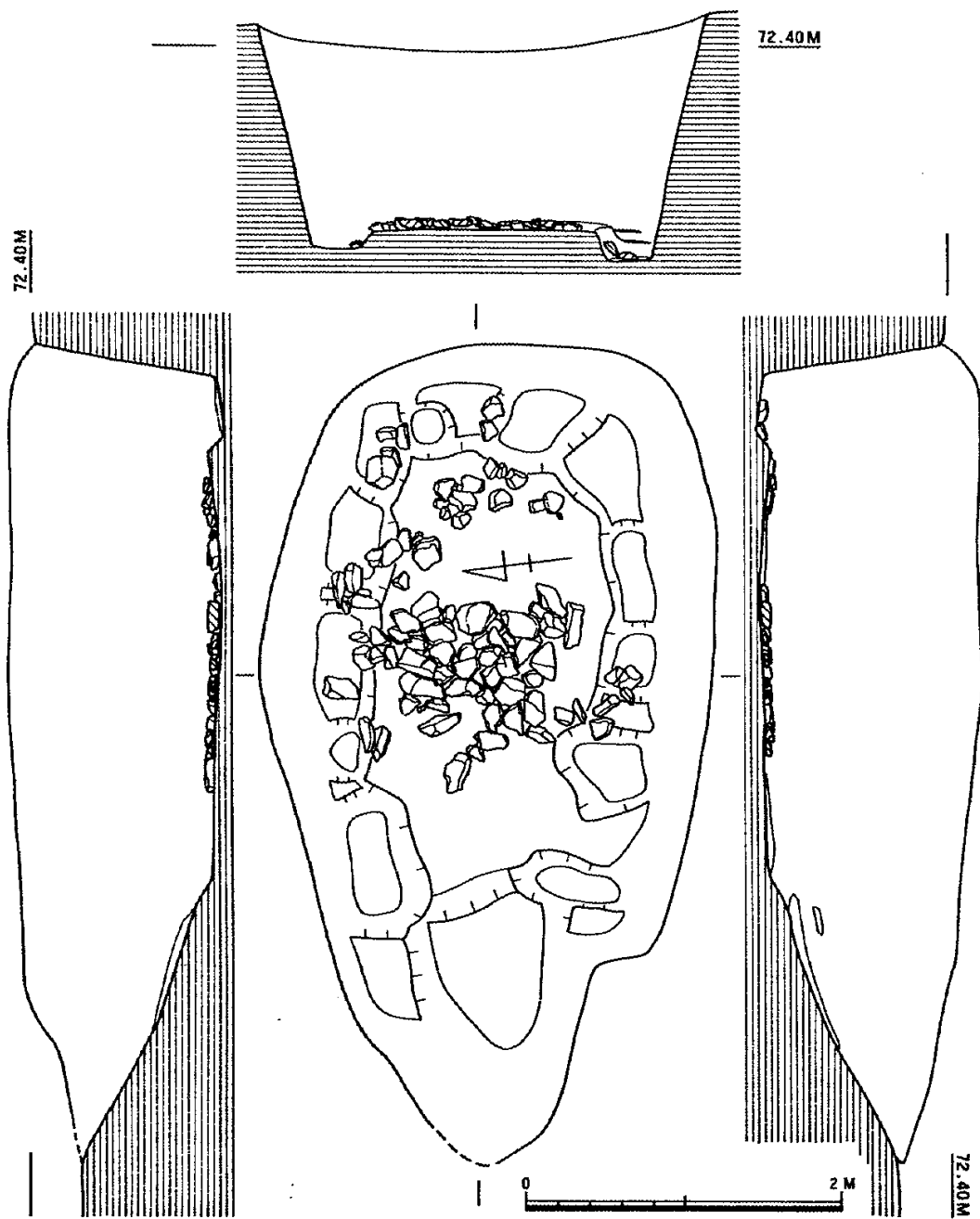
第5图 武丸町添遗迹I区1号墳主体部实测图(1/40)



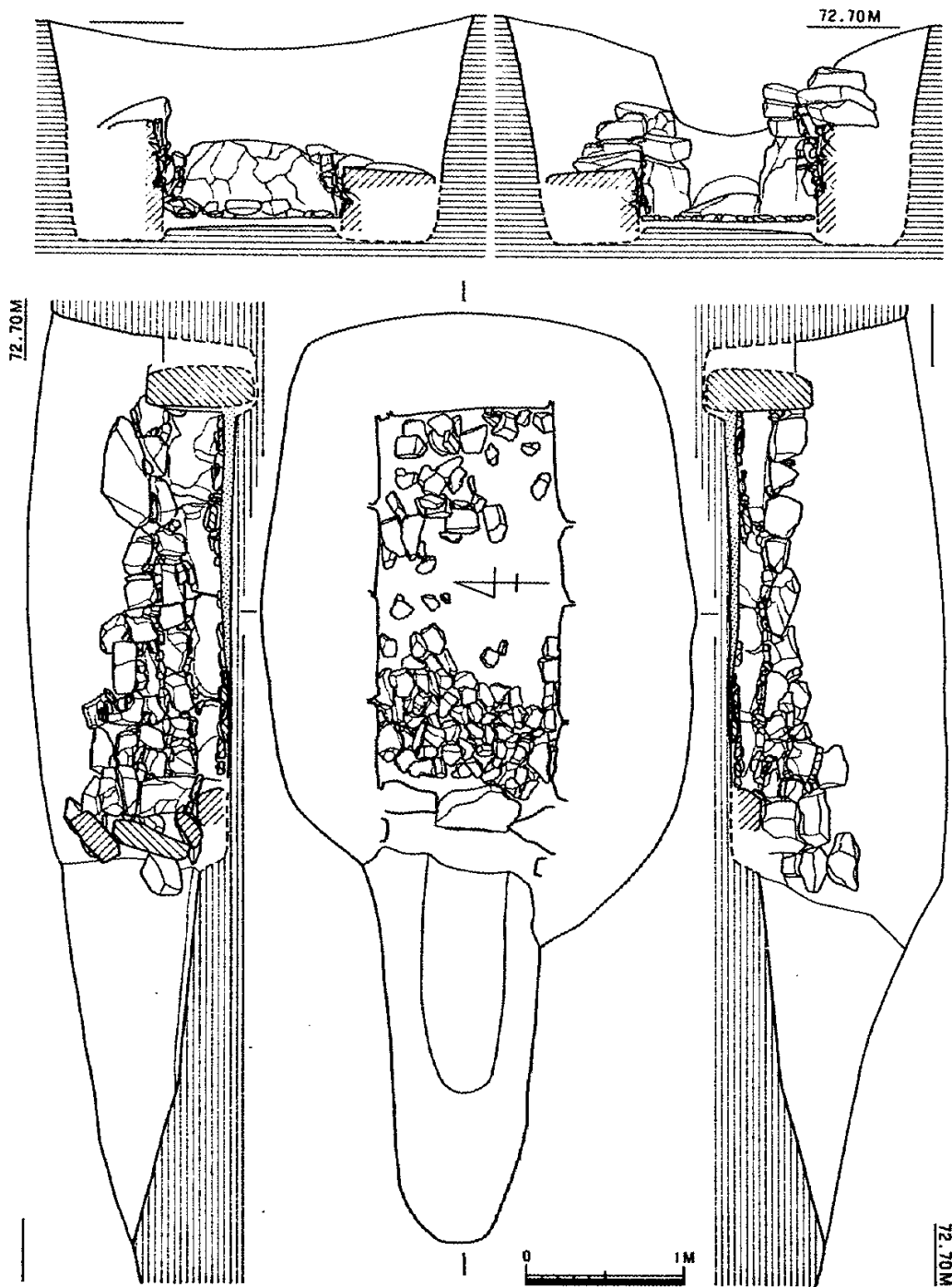
第6図 武丸町添遺跡1区2号墳主体部実測図(1/40)



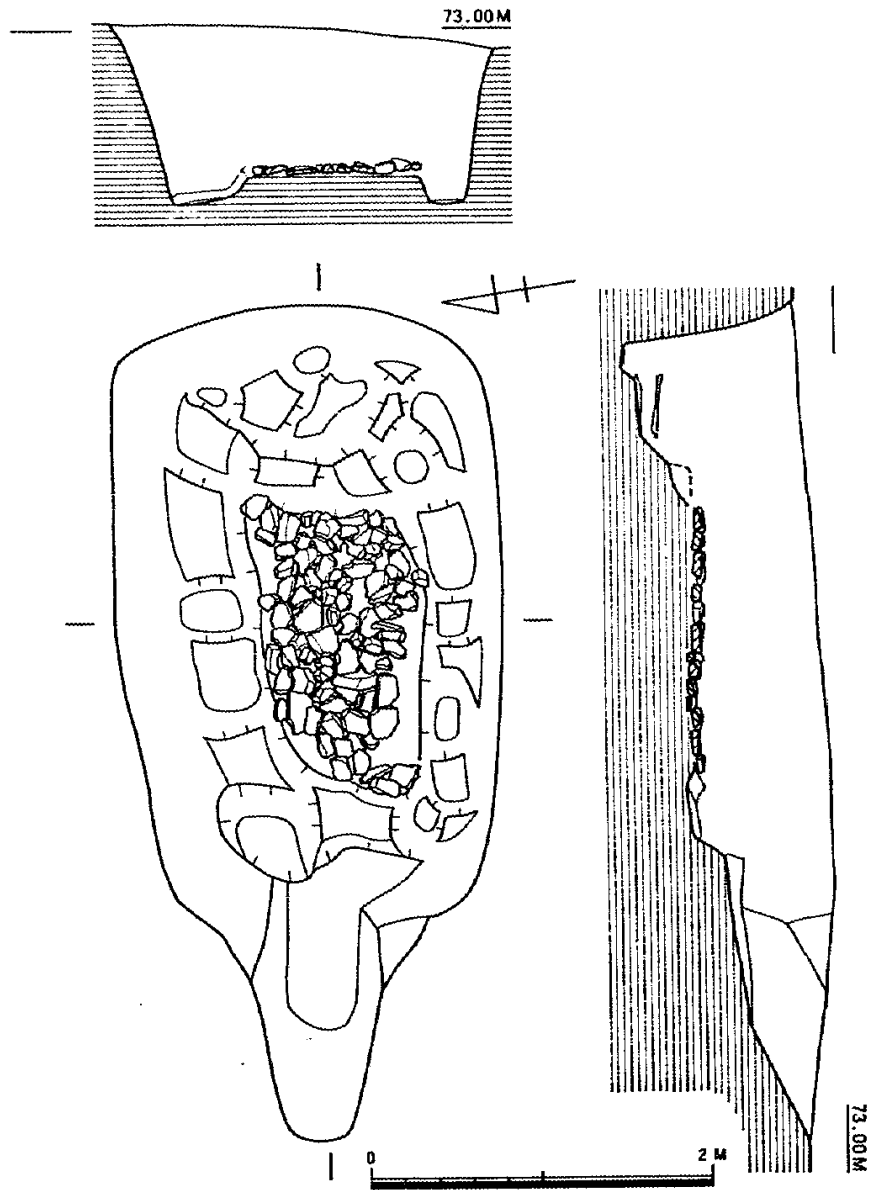
第7图 武丸町添遺跡I区3号墳主体部実測図(1/40)



第8図 武丸町添遺跡1区4号墳主体部実測図(1/40)



第9图 武丸町迹遗址I区5号墳主体部実測図
(1/40)



第10图 武丸町添遺跡1区6号墳主体部実測図(1/40)

遺構名	全長	前底長	門長	玄室長	前底幅	門幅	玄室幅	最大幅	框石高
1号墳	2.695	0.245	0.245	2.205	0.735	0.460	0.980	1.140	0.125
2号墳	3.150	0.740	0.350 0.310	1.750	0.810	0.660	1.130	1.400	0.090
3号墳	2.205	—	0.490	1.960	—	0.245	0.735	0.735	—
4号墳	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5号墳	3.000	0.300	0.300	2.400	0.920	0.460	1.100	1.180	0.120
6号墳	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第1表 I区検出古墳計測表(単位:m)

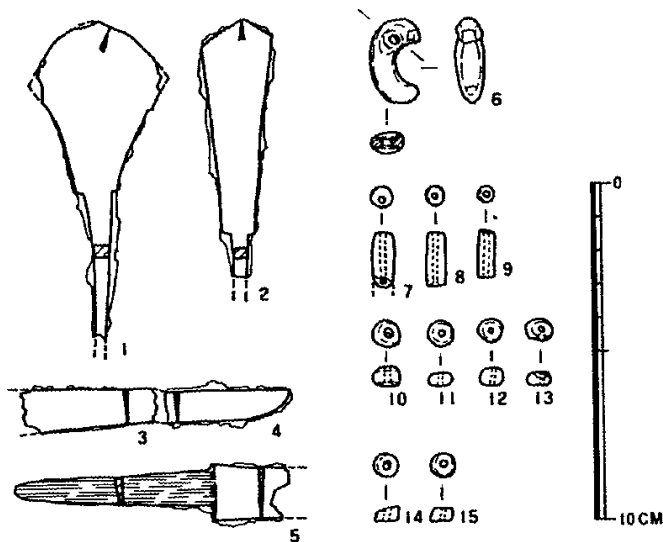
番号	器種	全長	最大幅	厚さ	穿孔径	穿孔方向	材質
1	鉄鏃	9.6	3.7	—	—	両面穿孔	—
2	鉄鏃	7.7	2.1	—	—	—	—
3	刀子	4.1	1.3	—	—	—	—
4	刀子	3.7	1.0	—	—	—	—
5	刀子	8.2	1.7	—	—	—	—
6	勾玉	2.5	0.9	0.7	0.2	—	硬玉
7	管玉	0.6	0.7	1.6	0.1	—	土製
8	管玉	0.6	0.6	1.6	0.1	—	土製
9	管玉	0.5	0.5	1.5	0.2	—	土製
10	丸玉	0.8	0.8	0.7	0.2	—	土製
11	丸玉	0.8	0.8	0.4	0.2	—	土製
12	丸玉	0.7	0.8	0.6	0.1	—	土製
13	丸玉	0.7	0.8	0.4	0.1	—	土製
14	白玉	0.7	0.7	0.5	0.2	片面穿孔	滑石
15	白玉	0.7	0.7	0.4	0.2	片面穿孔	滑石

第2表 I区出土遺物計測表I(単位:cm)

2) 遺物

(第11~14図)

本区出土の遺物は、玉類や鉄器、土師器及び須恵器などの土器である。このうち、玉類については、1号・5号墳からの出土である(第11図の6~15)。『以下11-6~15』と記す。また、鉄器(11-1~5)については、2号墳からの出土である。土器については、2号・4号・5号墳からの出土である。このうち、2号墳出土の土師器はその個



第11図 武丸町添遺跡1区出土遺物実測図1(1/2)

体があまにも細片のため、実測が不可能なばかりか個体の形態をうかがい知ることができなかった。

玉類 11-6~11-13は、1号墳石室内からの出土である。このうち、11-6は勾玉である。材質は硬玉製であり、その色は青緑色である。穿孔方法は両面からで、初めに両面とも直径約6mm程の浅い穴を開け、その中心から径2mm程の穴を穿っている。この断面は卵を寝せたようなものに仕上がっている。11-7~9は管玉である。いずれも土製品であり、その色は黒褐色である。また、11-10~3は丸玉である。いずれも土製品であり、その色は黒褐色である。これらの土製品は、11-6と連を成すものと考えるが、本墳が盗掘にあっているため、その出土量が少なく、どのようなものになるかは不明である。

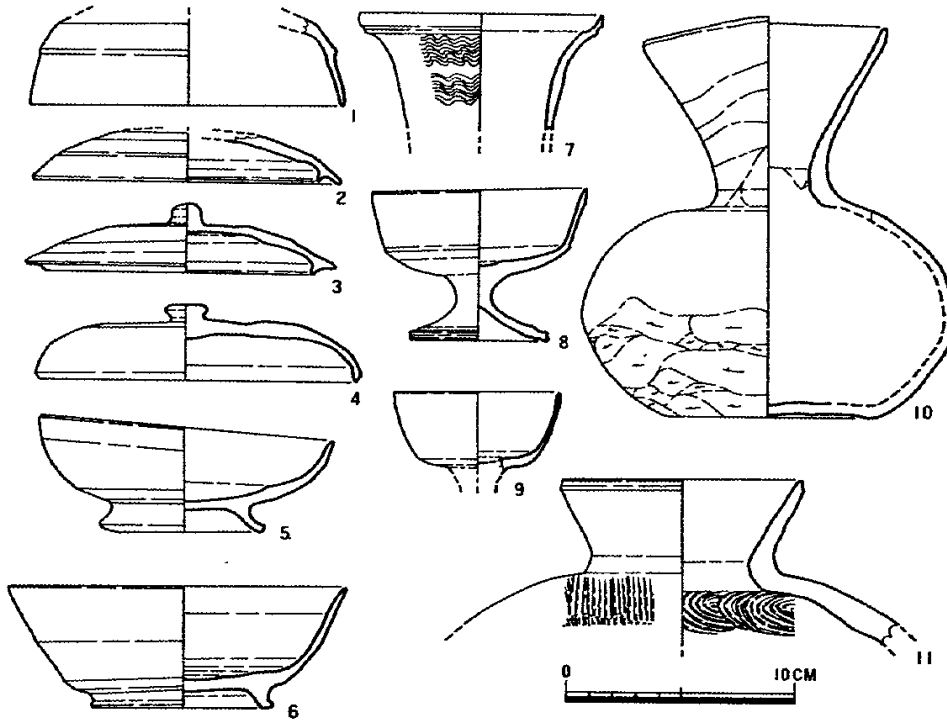
11-14・15は、5号墳出土のものである。いずれも滑石製の白玉である。その色は銀灰色で穿孔方法はその一端からの片面穿孔である。

鉄器 いずれも2号墳石室内からの出土である。このうち、11-1・2は平根式の鉄鏃である。その刃部の形態は1が圭頭・2が定角式に属するものと考えられる。11-3~5はいずれも刀子の破片であるが、その質や厚みなどを考えて同一固体であることが推測できる。

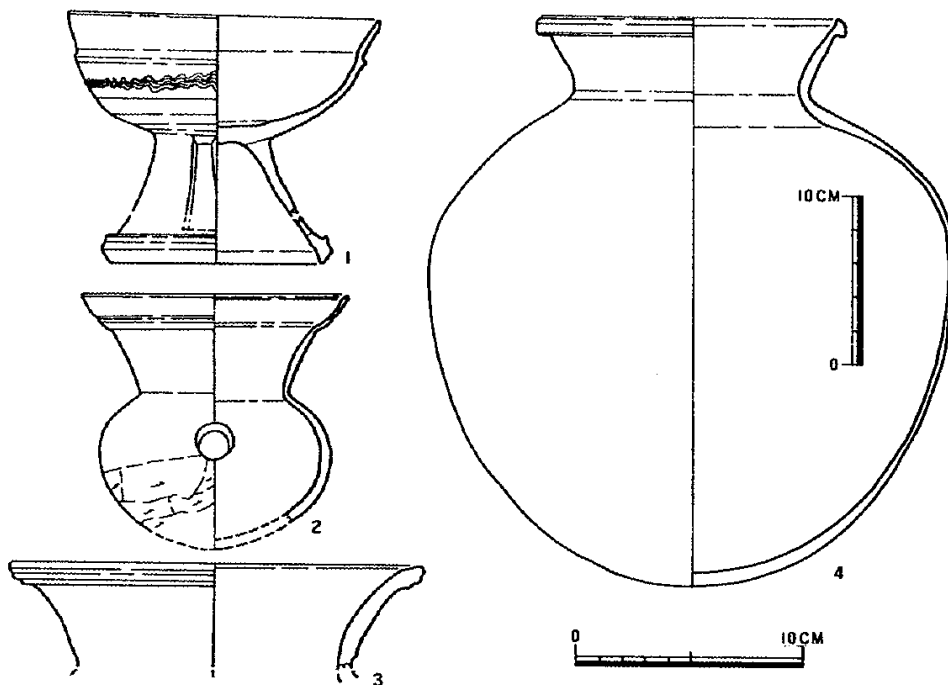
土 器 第12図は2号墳出土のものである。12-1~4は杯蓋で、その型は3~4類に分けられる。このうち12-1は墳丘北側から出土したもので、本古墳の築造時期をうかがわせる資料といえよう。12-5・6は杯である。その型は2類に分けられる。12-7は甕の口縁部と推測される。12-2~6、12-8~11は墓道及び石室内からの出土である。特に、12-8・10は玄門から奥壁をみて、右側袖部に置かれていた。

第13図は3号墳と4号墳の重なる部位で検出されたものである。遺物の整理上これらの土器は4号墳出土遺物と明記している。13-1は高杯である。本品は脚部に幅広の透かし窓を3か所にかけており、杯部は体部と口縁部の境に鈍ではあるが稜を有している。また、本品は13-2とともに、本古墳群出土遺物の中で、最古式のものであり、本古墳群の造営開始時期をうかがい知る資料となり得よう。

第14図は5号墳石室内出土の土器である。口縁部の法量は11cmと小さく、全体に丸みを帯びた形をしている。



第12図 武丸町添遺跡I区出土遺物実測図II (1/3)

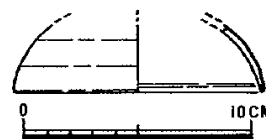


第13図 武丸町添遺跡1区出土遺物実測図Ⅲ (1～3は1/3、4は1/4)

(2) 竪穴遺構の調査

1) 遺 構 (第15図)

本区における竪穴遺構は、大別して、2つに分けることができる。その1は、全長が4mを超える長大なものであり、1号竪穴遺構がこれに当たる。また、この1号竪穴遺構は、その埋土中に大量の炭や焼土塊を含んでいるのが特長である。その2は、全長が1m内外のもので、2号～6号竪穴遺構がこれに当たる。この遺構は、その埋土中から何も検出することができず、その性格等を意味づけることは困難であった。



第14図 武丸町添遺跡1区出土遺物実測図Ⅳ (1/3)

番号	種類	口径	器高	体部径	鈕径	鈕径	脚部径	脚部高	底部径	穿孔径
12-1	蓋	(13.8)	—	(13.2)	—	—	—	—	—	—
12-2	蓋	(11.6)	—	(13.6)	—	—	—	—	—	—
12-3	蓋	11.8	(3.1)	13.8	1.0	1.4	—	—	—	—
12-4	蓋	14.0	3.4	14.4	0.8	1.9	—	—	—	—
12-5	杯	13.0	4.6	—	—	—	6.9	1.0	—	—
12-6	杯	15.0	5.4	—	—	—	8.0	0.8	—	—
12-7	盃	(10.8)	—	—	—	—	—	—	—	—
12-8	高杯	9.6	6.8	8.4	—	—	6.0	2.9	—	—
12-9	高杯	(7.4)	—	5.4	—	—	—	—	—	—
12-10	壺	10.8	17.0	16.6	—	—	—	—	9.4	—
12-11	横瓶	(10.6)	—	—	—	—	—	—	—	—
13-1	高杯	(13.8)	(11.2)	(13.0)	—	—	(9.4)	(5.5)	—	—
13-2	盃	(11.8)	(11.5)	(10.4)	—	—	—	—	—	(1.7)
13-3	甕	(18.2)	—	—	—	—	—	—	—	—
13-4	甕	17.4	34.1	30.9	—	—	—	—	—	—
14-1	蓋	(11.0)	—	—	—	—	—	—	—	—

第3表 I区出土遺物計測表1 (単位:cm)

遺構名	全長	最大幅	最小幅	深さ	備考
1号竪穴	4.16	1.48	1.10	0.30	炭・焼土塊有り
2号竪穴	1.68	0.55	0.40	0.73	——
3号竪穴	——	0.72	0.65	0.75	——
4号竪穴	0.94	0.58	0.42	0.25	——
5号竪穴	1.27	0.56	0.52	0.79	——
6号竪穴	——	0.68	0.61	0.42	——

第4表 I区検出竪穴遺構計測表(単位:m)

番号	種別	縦径	横径	穿孔径	穿孔径
16-1	寛永通宝	2.4	2.4	0.6	0.7
16-2	寛永通宝	2.2	2.2	0.6	0.7

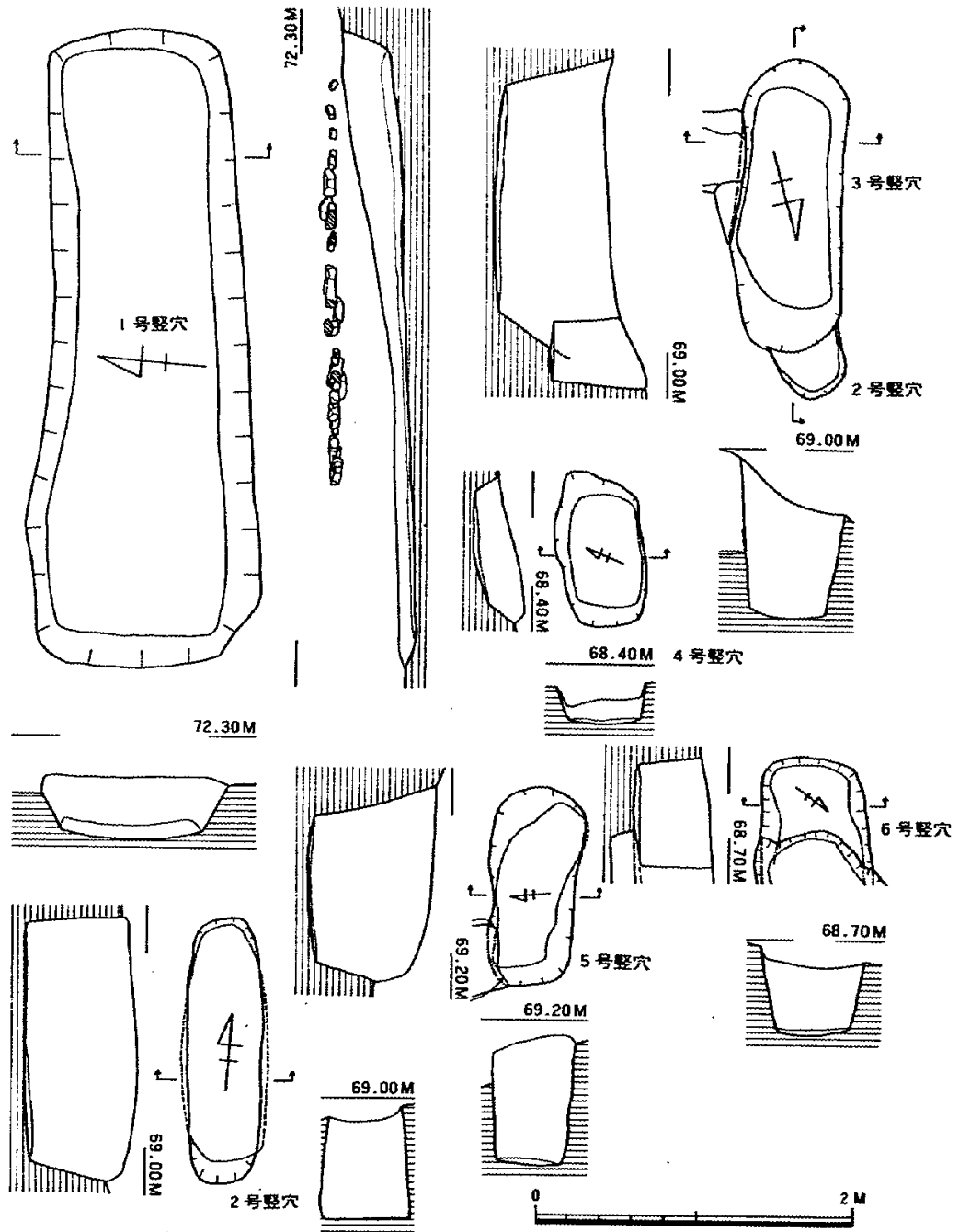
第5表 I区出土遺物計測表2(単位:cm)

番号	種別	口径	器高	底部径	体部径	A	B	底部切り離し痕
16-3	皿	(7.6)	(1.5)	4.8	——	(63.2)	(19.7)	糸切り離し
16-4	瓶	3.8	25.5	7.2	12.1	——	——	——
16-5	土鍋	(31.8)	(9.6)	——	——	——	——	——

第6表 I区出土遺物計測表3(単位:cm)

A:口径100に対する底径の比率指数

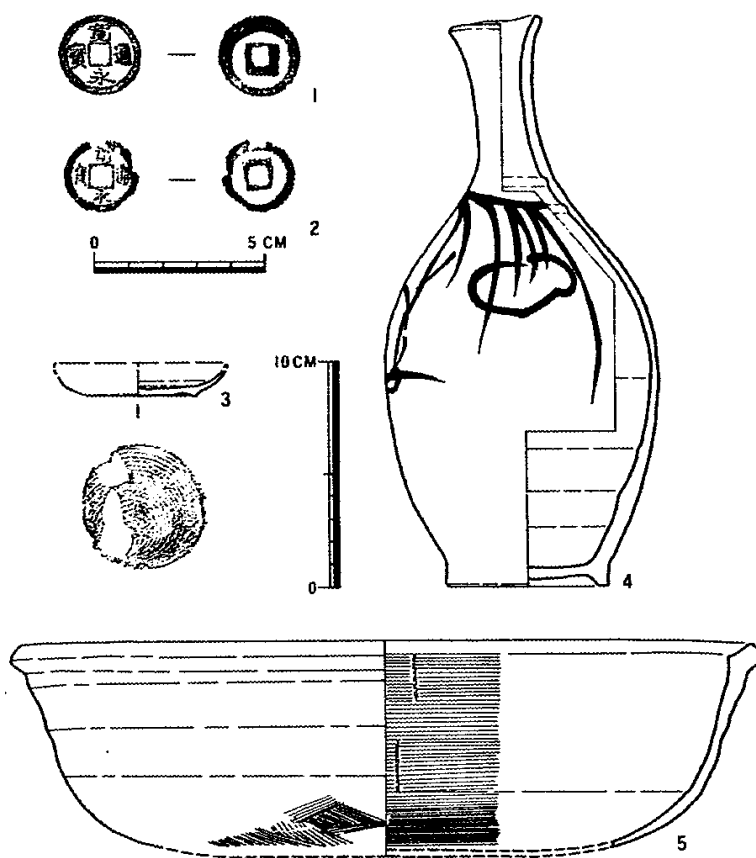
B:口径100に対する器高の比率指数



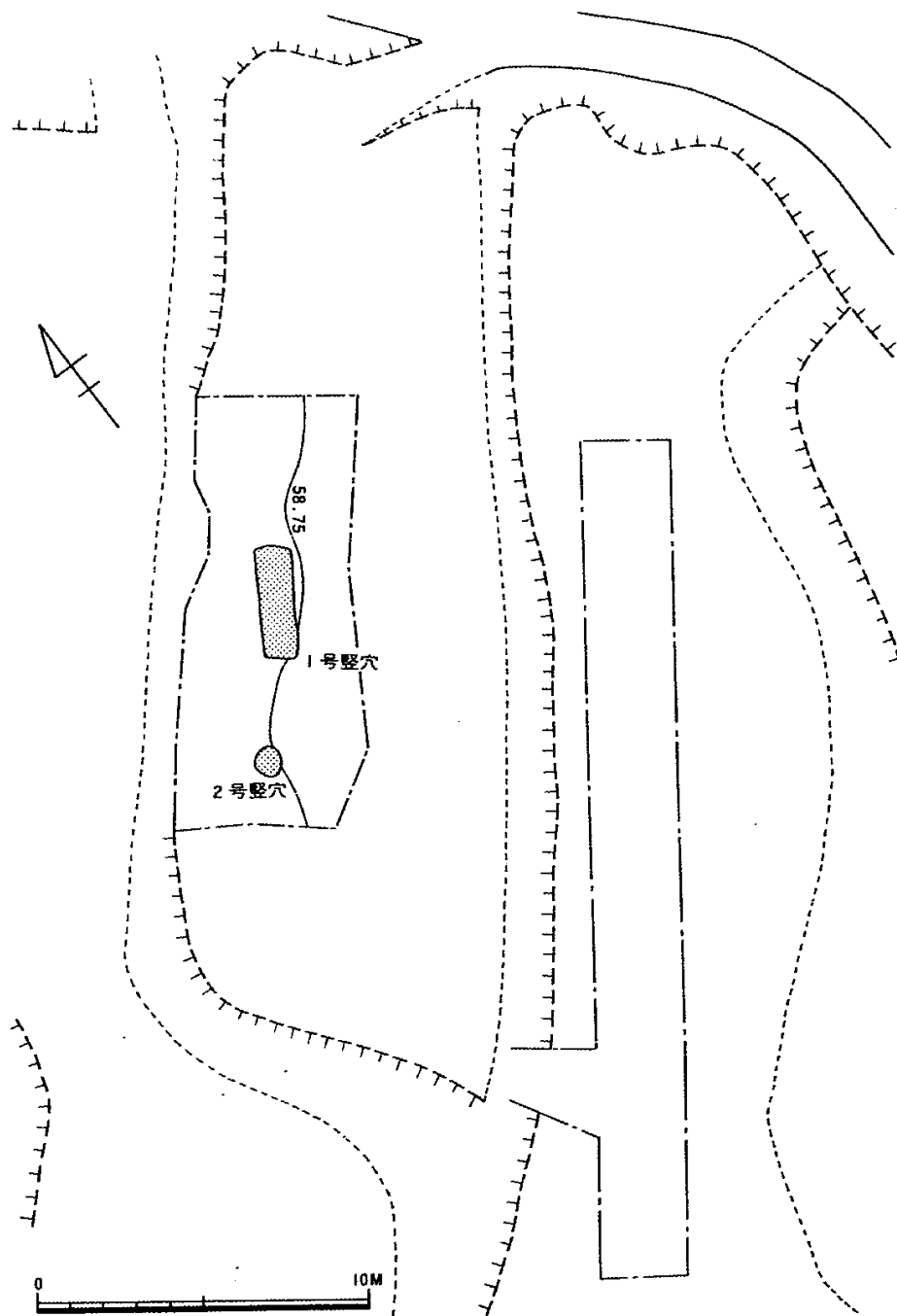
第15图 武丸町添遺跡I区整穴遺構実測図(1/40)

2) 遺物 (第16図)

16-1・2は貨幣である。いずれも、寛永通宝であり、法量は第5表のとおりである。16-1の法量は明暦二年江戸島越所鑄銭のものと同じ法量である。また、16-2は明和五年江戸深川亀戸所鑄銭のものと同じ法量である。16-4は肥前窯系の瓶と思われる。『国内出土の肥前陶磁』³によると沖縄県出土のものとよく類似している。



第16図 武丸町添遺跡I区出土遺物実測図V (1/3)



第17图 武丸町添遺跡Ⅱ区遺構配置図 (1/200)

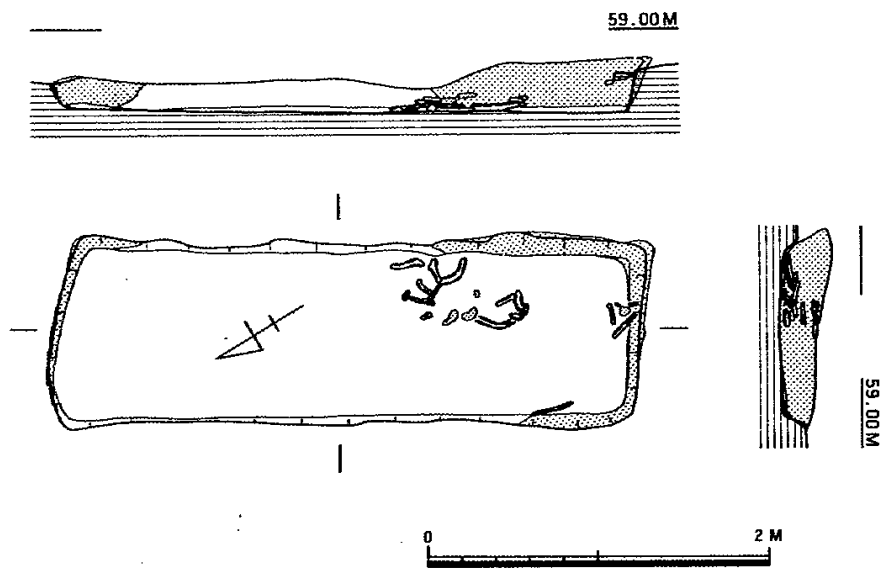
5. II区の調査

本区は、標高58.979m～58.624mの間に分布している。遺跡は水田耕作土下約40cmの所に検出された。この遺構面から耕作土の間には4枚の土層が確認されている。上から黄白色砂質土層、暗黄色土層、暗褐色土層、暗黒褐色土層である。このうち、暗黒褐色土層は、遺構面を覆うもので、若干の土師器等を包含している。また、暗黄色土層は、肥前窯系陶器等を包含している。

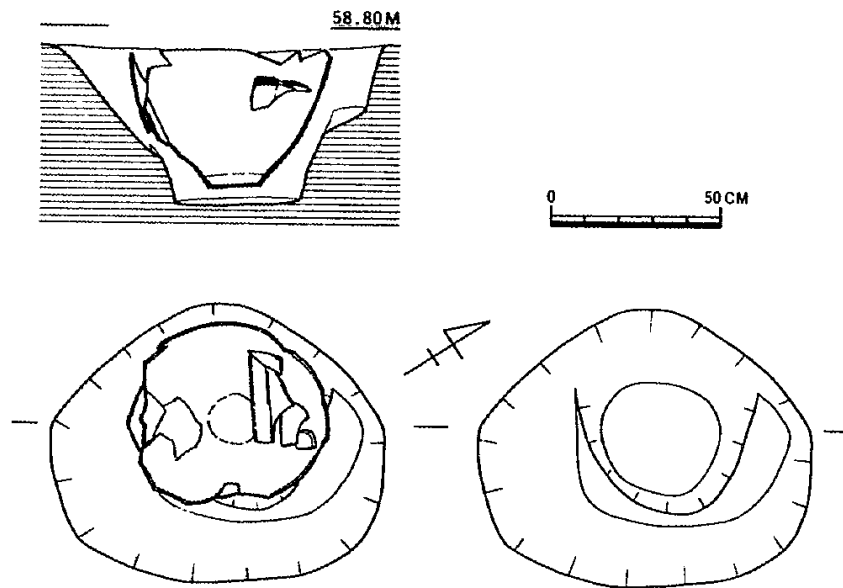
本区検出の竪穴遺構は、1号がI区検出の1号竪穴遺構と同類になるものと思われる。また2号については、瓦質の甕が埋納されているがその性格は不明である。

遺構名	全長	最大幅	最小幅	深さ	備考
1号竪穴	3.50	1.18	1.10	0.30	炭・焼土塊有り・壁赤変
2号竪穴	0.98	0.83	—	0.48	甕埋納

第7表 II区検出竪穴遺構計測表 (単位：m)



第18図 武丸町添遺跡II区1号竪穴遺構実測図 (1/40)



第19図 武丸町添遺跡Ⅱ区2号竪穴遺構実測図 (1/20)

番号	種別	口径	器高	底部径	体部径	A	B	高台径	高台高
20-1	碗	(17.2)	6.6	—	—	38.4	—	5.4	1.2
20-2	杯	(7.2)	1.7	(4.4)	—	61.1	23.6	—	—
20-3	杯	(9.4)	1.7	(5.6)	—	59.6	18.1	—	—
20-4	甕	57.8	58.0	16.4	61.4	28.4	100.3	—	—

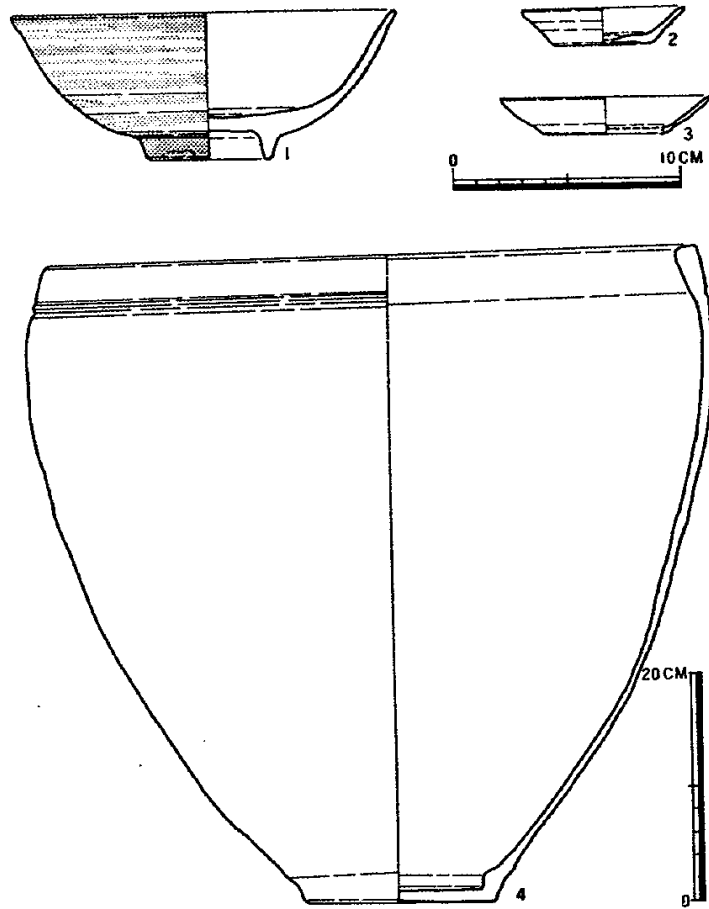
第8表 Ⅱ区出土遺物計測表

A：口径 100に対する底径の比率指数

B：口径 100に対する器高の比率指数

出土遺物 (第20図)

20-1 は肥前窯系の碗であろう。ほぼ直線的に立つ高台から湾曲しながら立ち上がる体部、緑がかった釉薬に灰をかけている。また、20-2・3は口径に対して底部が小さく、その外形は武丸原遺跡出土の土師器に類似しており、本区検出の1号竪穴遺構との関わりを見出せる。



第20図 武丸町添遺跡Ⅱ区出土遺物実測図 (1~3は1/3、4は1/6)

6. まとめ

今回の調査では、Ⅰ区・Ⅱ区の調査において、6基の古墳と8基の竪穴遺構を検出することができ、吉武地区における地域史解明の新資料として新しい頁を加えるものとなった。以下、これらの検出遺構や遺物についてまとめることとする。

本調査Ⅰ区における6基の古墳は、1つの群を構成するもので、新立山を核とする舌状丘陵上における墳墓のあり方の1例を示すものといえよう。

この古墳群の造営は、その出土遺物や遺構などから、6世紀前半代にその造墓が開始され、8世紀代までその営みが続けられていたものと推察される。また、丘陵上における造墓序列はこの古墳群のほぼ中央に位置する前底側壁を持たない両袖の横幅が狭い長方形プランを成す3号墳がその最初のものとなろう。つぎに、丘陵中央部よりやや下ったところに位置する短い前底側壁を持つ両袖のもので、玄門部が奥壁部に対して短い、所謂、羽子板状プランを成す1号墳がつくられたのであろう。これに続き、前底側壁を持ち両袖を有するほぼ長方形を成す5号墳がつくられ、相前後するように4号・6号墳がつくられたのであろう。最後に丘陵頂部を離れた西斜面に2号墳がつくられ、当丘陵の古墳築造を終る。この後、若干の追葬や祭祀をくりかえし、その終焉をむかえることとなる。

古墳が途絶えること6世紀の長き時間を経て、Ⅰ区1号竪穴遺構及びⅡ区の竪穴遺構が出現する。このうち、Ⅰ区1号竪穴遺構及びⅡ区の1号竪穴遺構は、武丸原遺跡検出の2号竪穴と類似するものであったが、本遺跡の当遺構も武丸原遺跡検出の2号竪穴を火葬に関する遺跡と確定できる資料とはなり得ず、同資料の性格を解き明かすには、今後の類似資料の増加を待たねばならない。しかし、当遺構の造営時期は、Ⅰ区出土の土師器皿の方量が、武丸皆真庵遺跡^⑥出土土師器皿Ⅱb類の方量と類似することやⅡ区出土の杯が、武丸原遺跡の杯と外観の器形が類似することなど、当遺構やその周辺遺物などの検討から、大内氏の筑前国支配体制下にあった時期を想定することができるであろう。

以上が本遺跡のまとめであるが、特に本遺跡検出の竪穴遺構については、大内氏と深く関わりを持っていた宗像大宮司家の宗像支配体制下の時期であり、当遺跡が、宗像大宮司家の足跡を示唆する遺跡の1つとなる可能性も残していることも考えられるもので、今後の同類遺構検出の重要性をここに記し、まとめとしたい。

註1：『埋蔵文化財発掘調査報告書』宗像市文化財調査報告書第9集 武丸小伏遺跡 宗像市教育委員会 1985

註2：『埋蔵文化財発掘調査報告書』宗像市文化財調査報告書第9集 武丸高田遺跡 宗像市教育委員会 1985

註3：『埋蔵文化財発掘調査概報』宗像市文化財調査報告書第10集 吉留京田遺跡 宗像市教育委員会 1986

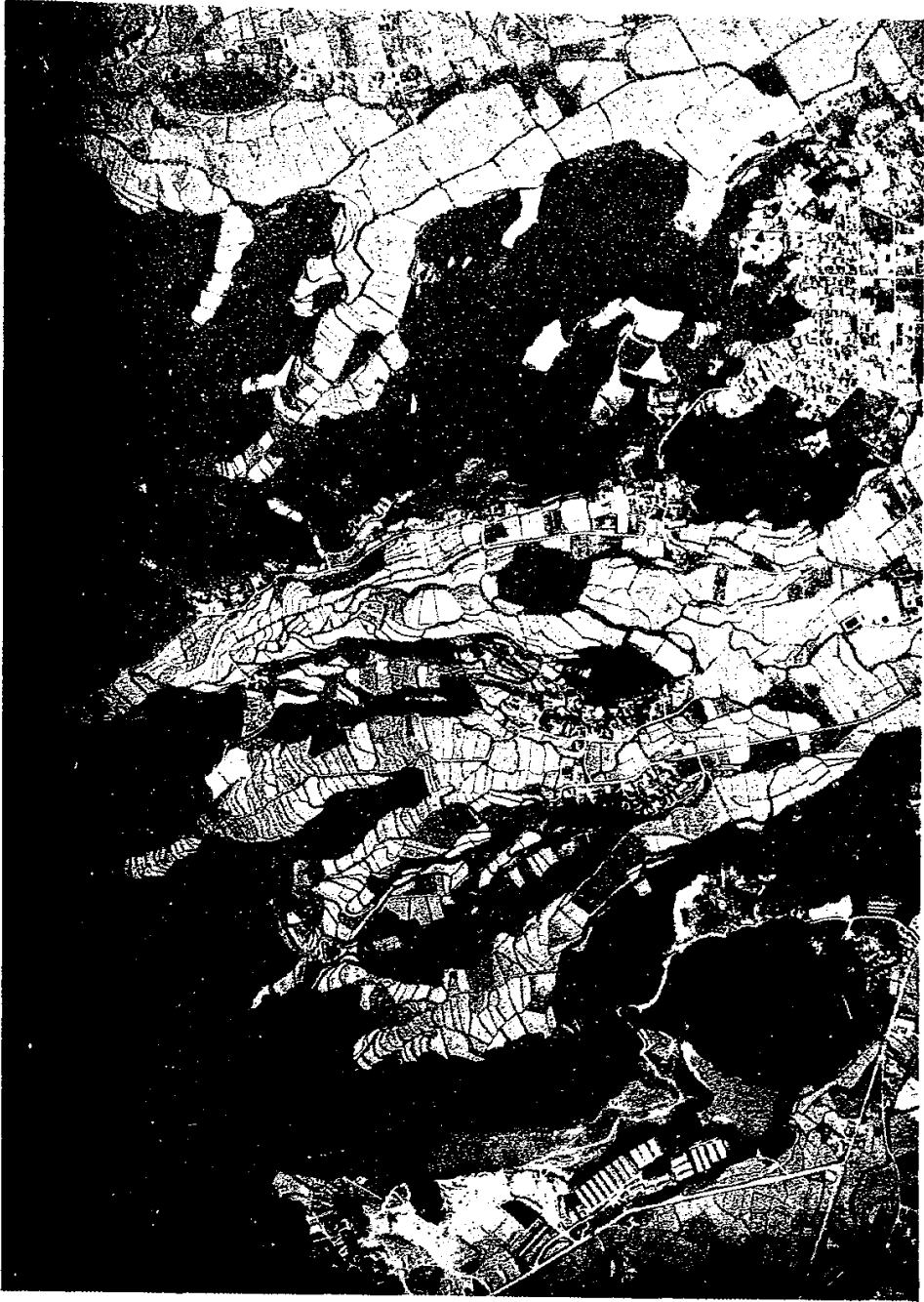
註4：『武丸原』宗像市文化財調査報告書第17集 宗像市教育委員会 1988

註5：『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984

註6：『武丸皆真庵』宗像市文化財調査報告書第15集 宗像市教育委員会 1988

圖 版

図版1



武丸町添遺跡周辺空中撮影



1. 武丸町徳造跡調査前写真



2. 武丸町徳造跡調査前写真



1. 武丸町添遺跡調査後写真



2. 武丸町添遺跡調査後写真



1. 1K1号坟主体部



2. 1K2号坟主体部



3. 1K3号坟主体部



4. 1K4号坟主体部



1. I区5号墳主体部



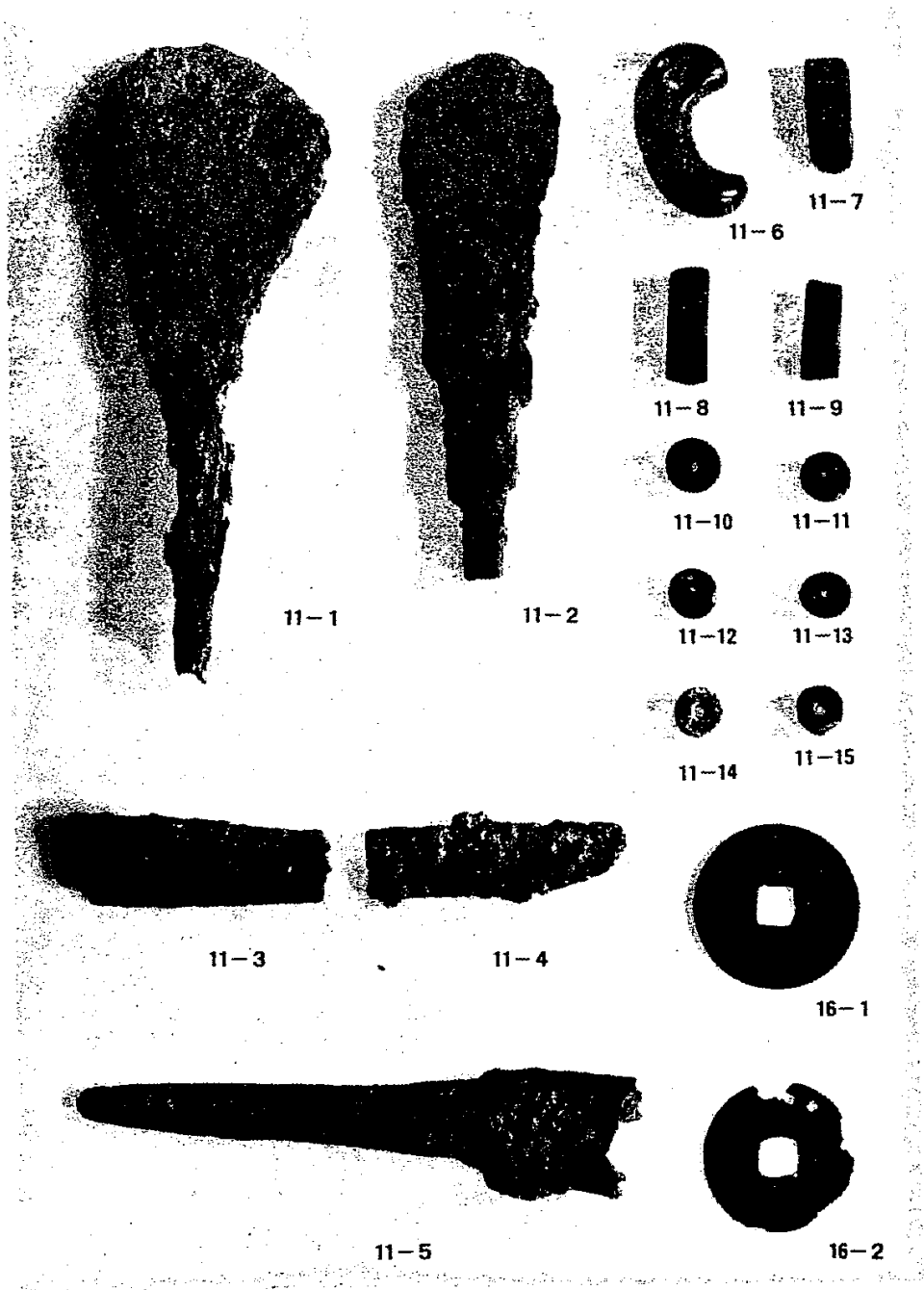
2. I区6号墳主体部



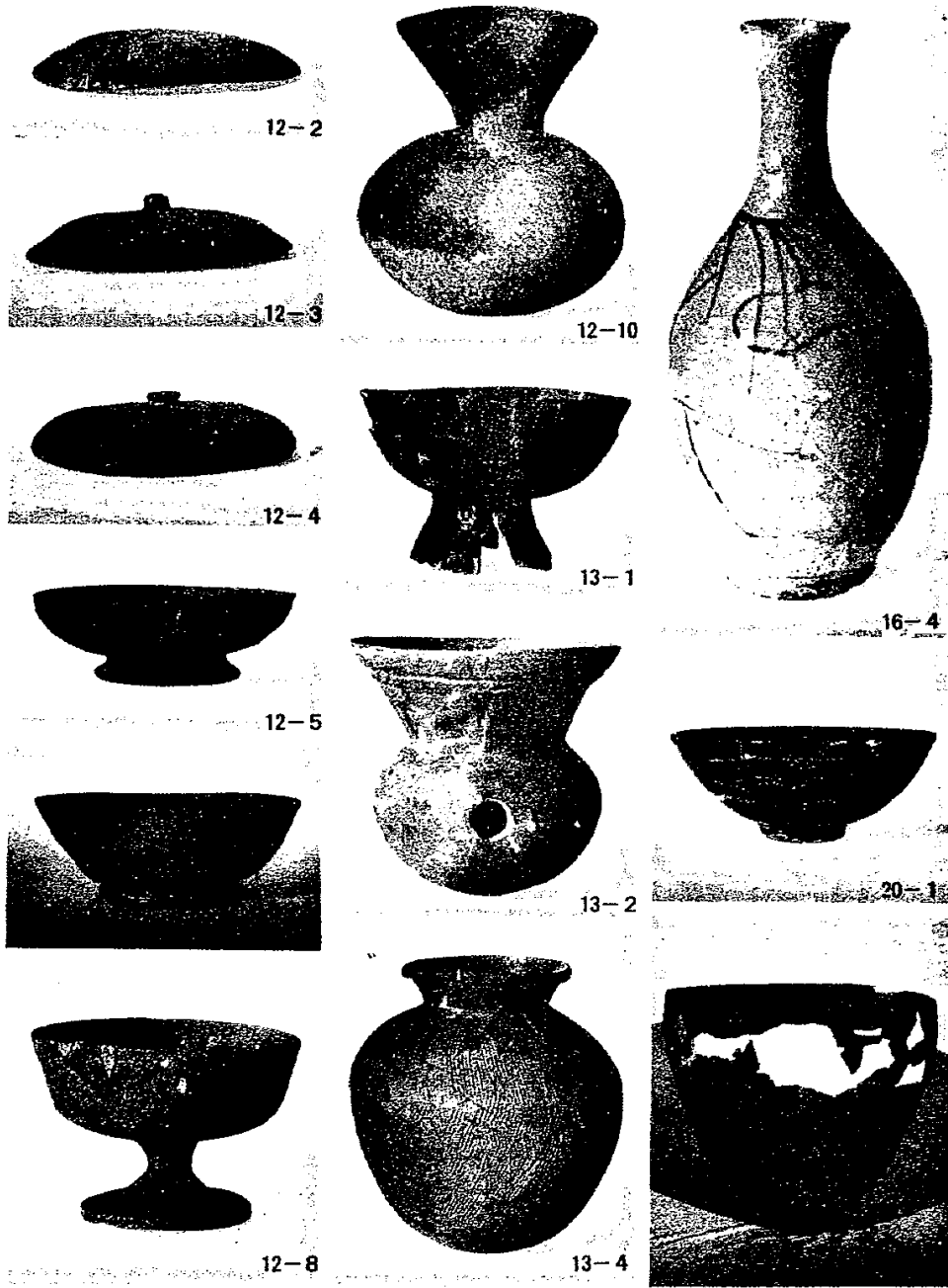
3. II区1号竖穴遺構



4. II区2号竖穴遺構



武丸町添遺跡出土遺物



武丸町添遺跡出土遺物

宗 像

武丸町添遺跡

宗像市文化財調査報告書 第20集

1989年3月31日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜瀬印刷
福岡県宗像市河東